



2011年(平成23年)
3月号(No. 790)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

「東日本巨大地震」発生！	1
そして、山人間たちができること	1
平成22年度第2回通常総会で、「公益法人」を選択	4
年末年始の山岳気象と精度が高かった予報	6
ポーランド山岳会と日本との交流	7
森林環境を形成するもの——生態学六講座と野外活動	8
空沼小屋(秩父宮ヒュッテ)の憂える現状	9
東西南北	10
横有恒の署名本／短歌	
活動報告	11
自然保護委員会／図書委員会／	
アルパインスケッチクラブ	
支部だより	13
福岡支部	
図書紹介	14
図書受入報告	15
追悼・山岳会のご長老・堀田弥一名誉会員を偲ぶ	16
会務報告	17
ルーム日誌	18
会員異動	18
INFORMATION	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10～20時
水・金……………13～20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10～18時
ゴールデンウィーク休室 4月29日～5月5日

「東日本巨大地震」発生！ そして、山人間たちができること

江本嘉伸

日本列島が未曾有の危機に見舞われている。3月11日に起こった「東日本巨大地震」に続き津波、原発事故が相次いだ。こうした非常事態に、われわれ登山者はなにができるのか——。元新聞記者の江本嘉伸さんに緊急のレポートを綴ってもらった。

雪洞クライマーとの電話

3月11日午後2時46分、四谷の仕事場でもゆらりと揺れが始まった時、福岡県に住む登山家と電話で話していた。

興味あるテーマだったので話が弾み、15分ほど話が進んだ時、突然ぐらりときた。それがすぐには終わらない。「この地震、かなりの揺れだ」と説明し、「すまん、

一度切るよ」と言って電話を置き、本の重みでゆらゆらし始めた書棚の倒壊に備えた。

毎年2月になると、「植村直己冒険賞」が発表される。第15回目となる今年「2010植村直己冒険賞」は2月16日、福岡市在住の栗秋正寿(38)と発表された。この会報「山」(783号)で「53泊の雪洞滞在、83日間におよんだハ

東日本巨大地震のお見舞い

会長 尾上昇

巨大地震とこれに伴う大津波は日本の各地に未曾有の被害をもたらしました。不幸にして被災された会員とご家族、大勢の地域の皆さま

にある。電線がひゅんひゅん、と音をたててしなり、トタン屋根が何かが倒れる音がした。

はじめは、わずかの被害しか伝えなかつたテレビニュースが少しずつさまじい被災現場の様子を伝え始めた。阪神淡路の時もそうだった。これは、もしかしたらとんでもない災害になるぞ、と、初めて感じた。

交通機関はすべて止まった。夜にかけて近くの新宿通りは、歩いて帰宅する人たちが満杯となった。

まに、心からのお見舞いを申し上げます。救援、復興に当たっては、常に安全を心がけ、危険に対処する術をお持ちの会員各位に格別のご尽力をお願い申し上げます。私たち被災地から離れている者も精一杯お力になりたいと思います。

そう、歩道が「満杯」なのだ。冷えこんできた。途中のコンビニに立ち寄る人も多く、あったかな肉饅頭を筆頭にたちまち食品類は売りきれた。

マグニチュード9.0「計画停電」原発爆発

信じられない規模の津波を伴った今回の広域大規模地震について、気象庁は13日になって「マグニチュード8.8」から世界観測史上最大級の「9.0」に修正した。当初数百と伝えられた死者・不明者は、3月14日になって「宮城県だけで1万人以上」と伝えられ、阪神淡路大震災を越える、最大規模の惨事であることが明らかになった。一にも二にも「TSUNAMI」の猛威によるものだ。

親族や知人が被災地に住む日本国民だけでなく、世界を驚愕させたのは、テレビ画面に次々と映し出される「津波の瞬間」の映像であろう。海の水が不気味に押し寄せて住宅地や農地を襲い、車を、家を苦もなく押し流し、藻屑と化してゆく情景が、場所を変え、角度を変えて何度も映し出された。必死に逃げる軽トラックや乗用車

が濁流に飲み込まれてゆく風景は、なんと恐ろしく、悲しいことか。町がまるごと壊れて流されてゆくのである。まさに日本が沈没してしまうような、言いようのない無力感に多くの日本人が襲われた。残念ながら、日本にとつてとてつもない試練が始まったのだ。山登りも探検も冒険も、日本山岳会どうあるべきか、などの命題も、日本人が直面したこの最大の危機の前にはすつ飛んでしまう。

当面、孤立した被災者をどう救出するか、が何よりも問われる。国は自衛隊員を当初の5万人体制から10万人に引き上げ、行動を開始しているが、重機がなかなか使えない状況ではこの増員は大いに心強い。被災地が広大な地域にまたがっているため、すべての孤立した集落に救助の手が届くまで時間はなおかかりそうだ。

追いつけをかけるように、電気である。供給電力の不足から東京電力では3月14日以降、まさかの「計画停電（輪番停電）」を実施する事態となった。管内1都8県で5グループに分けて3時間程度ずつ電気を止める計画で4月末まで実施する、という。14日の節電初

日、JRはじめ多くの電車が運行を止めた。「できるだけ仕事に行かないで」と、国家が訴えるのだから異様な事態だ。道路の信号機は機能せず、現金自動預払機（ATM）も節電でストップする、という。病院の治療には深刻な影響が出るだろう。パソコンなど通信機器も充電ができない。そして、ほかに何が起きるか。今の日本で電気が止まると、どんな影響が出るのか、誰にもわからない。東北電力も節電に踏み切る動きという。そして、現在最も心配されるのが原発事故である。福島第1原発1号機から3号機で相次いで爆発が起き、20^{*}以内の住民に避難が呼びかけられている。さらに15日には4号機で火災が発生、超濃高度の放射能が拡散しはじめた。30^{*}以内の住民には「屋内退避」が要請された。尋常ならざる事態だ。情報が錯綜してなかなか真実が見えてこないのがもどかしいが、集団疎開^{*}が緊急課題となりそう。

自衛と「アウトドア義援隊」

今回の大震災では当然、さまざまな分野で影響が出ている。計画

節電が決まる前でも13日に予定されていた「名古屋国際女子マラソン」、プロ野球のオープン戦は中止され、サッカーJリーグも2節の全試合を中止とした。NHKは14日まで大河ドラマをはじめすべての番組をやめて終日「震災特別番組」とし、13日まで民放各局からはコマーシャルが消えた。新聞も2日間は広告なしの紙面だった。モンベルの『OUTWARD』誌3月号が、地震発生当日届いた。そこに「冒険塾」という新しい企画が発表されている。塾長は会長の辰野勇自身。〈今こそ、「冒険」を見つめなおし、その行為の持つ価値が評価される社会の実現と、他人と比べることのない自らの冒険を目指す若者を応援したいと考えて「冒険塾」を発足することになった〉と書いている。

本人に聞いたことだが、辰野は最近大腸ガンを患って命と向き合った体験から、かねてやりたかったこと、この冒険塾の実行を思い立った。しかし、命の尊さについては冒険塾より、この未曾有の津波災害と向き合うことが先になった。

日本各地の自然学校、環境教育

関係団体などで組織する「日本エコツーリズムセンター(通称エコセン)」というネットワークがある。ここでは都内西日暮里の事務局で「コーディネート・養成会」を実施中、地震に遭った。阪神淡路大震災など災害救援で実績のある代表理事の広瀬敏通らはただちに支援策を練るべく、メーリングリストを通して全国の同志に呼びかけた。17日に予定していた理事会を急遽、救援会議に切り替え、「広域長期の支援体制について」話し合うつもりだ。

モンベルでは12日には、アウトドア業界に従事する人々に向けて「アウトドア義援隊」を組織、テント、寝袋、ガストロップ、食物など被災地で役立つ物資の協力、援助金カンパを呼びかけた。これに呼応するかたちで広瀬たち災害救援チームは人的支援を担当、ボランティアを募ることになる。原則として「現地で支援物資の配布などの活動できる人。衣、食、住、移動手段は各自でまかなう」ことが望ましい。救援拠点として仙台市の中心部にある青葉通りのモンベルショップが開放されることが決まっている。

外国の救助チームも続々と来日して現場に向かっている。韓国、中国、アメリカ、先日、地震があったばかりのニュージーランドからもだ。世界中のメディアが大きな関心とともにこの惨事を伝えたなかで、「この大災害のなか、冷静に沈着に振る舞う日本人」に感嘆する声が非常に多い、とのことだ。

登山者たちができること

では、こういう状況になって、日本の山を愛する者たちは何ができるだろうか。

各種イベントが中止されたなかで日本山岳会の総会は12日、予定通り開催された。中止するものタイヘンだったのだろう。理事会が決めた「公益法人選択」(申請)が賛成多数で承認されたとのことだ。日本山岳協会は逆に13日に予定していた春の総会を中止した。全国の県岳連から招集するのは、さすがにためらわれた、ということだ。かわりに「私たち全国の山仲間、皆様の安全を祈念しつつ、この困難な状況を一刻も早く改善する救援活動に出来る限りの協力をしたいと考えております」と、会長名の文章をウェブサイトに載

せた。

日本登山医学会も13日、理事長名で「福島・宮城・岩手・青森など被災地在住の私たちの仲間とはもとより全国の日本登山医学会の会員は、皆さまの安全を祈念しつつ、困難な状況を改善する諸活動にできる限りの協力をしたいと考えております」とウェブで表明した。

医師の応援増員はこれから必至と思われるから、心強い。NHKでは同会からのアドバイスとして避難者の低体温症にどう対処するか、具体的な方法を繰り返し放映した。

登山はもともと個人が好きでやる行為であり、社会的には何も生み出さないと見られることの多いジャンルである。ともすれば世間からはみだしがちで、まあ、それでもいいや、という人も少なからずいる。一方で、四季を通して大自然を舞台に活動しているから、一般の市民に比べてサバイバル力は優れている。そういう登山家たちには果たせる役割がこういう災害ではあるのではないか。

ただし、おそらく、息の長い闘いになる。しろうとが焦って今すぐ行動しようとしてもムリであろう。日本山岳会を含めて、これま

で考えもつかなかった支援の方法を考え出す必要がある。

とりあえずは、「東日本巨大地震」に関するネットワークを構築することではないか。日本山岳会内部だけでも東北、関東に多くの支部があり、情報の共有は可能のはずだ。さらに山の日プロジェクトなどで行動を共にする山岳団体との連携を広げれば一層効果が出るのでは、と考える。

原発事故で、疎開、せざるを得なくなった人々をどう受け入れ、支援するか、も山人間ならできることである。阪神淡路、中越地震などでも発揮されたアウトドア的サバイバル能力と技術をぜひ活かすように、皆で知恵を絞りたい。もちろん、被災された方々へのお金の支援は何にもまして大事だが、同時に支援作業にあたる人たちがしばしば自前でやらなければならないことも考える必要がある。つまり「支援行動のための基金」についても考えたい。日本山岳会会員以外でももちろんいい。若く、活動的な働き手のための支援である。

山の世界が仕事をする時だと、強く思う。

総会速報

平成22年度第2回通常総会で、「公益法人」を選択

3月12日、平成22年度第2回通常総会が、東京・四ッ谷の主婦会館ブラザエフで開催された。詳細は次号での報告になるが、第3号議案の新法人移行については、以下に今号で速報する。

まず冒頭、尾上会長から次のような挨拶があった。

「まずは11日午後に起きました東北地方・太平洋沖地震で被災されました方々に心からお見舞い申し上げます。JACには、東北地方にも多くの会員がいらつしやいますし、支部も多数あり、来られな

いと直接連絡いただいた方もいらつしやいます。この非常事態に、総会を開催するかどうか、ずいぶん悩みました。本日の第3号議案ですが、新しい法人への移行の方向性が結論づけられないことには、

その後のスケジュールが大変きつことがあり、熟慮の結果、やむを得ず開催させていただくことにしました。

6月の新年度の第1回総会で、

高橋重之、小清水敏昌

新法人制度へ移行するための定款の変更を会員の皆さまにお願いし、それに基づく新法人移行への申請書類も作らなくてはなりません。

来年の4月1日から新しい法人へ移行するためには、遅くとも夏ごろまでに申請する必要があります。そうした切羽詰まった事情から、この総会をいわば「強行」させていただいたということをご理解いただきたく、よろしくお願いいたします」

新法人移行を審議「公益法人」を選択

3号議案である「新法人移行の選択（公益社団法人）承認の件」を審議した。提案理由の説明を宮崎絃一副会長が行なった。賛否両論、それぞれの立場からの質疑応答があった。

宮崎副会長 公益か一般かの選択を迫られている。どちらか選択しないと、新法人への移行を申請することができない。法人改革

対応プロジェクトチームを立ち上



総会の冒頭であいさつする尾上会長

げ、吉永英明チームリーダーのもと、それぞれについてのメリット・デメリットを精査し、その結果を理事会に提出してもらった。理事会では、昨年11月から今年1月の3カ月にわたって慎重に討議し、最終的に個々に意見を出してもらった。その結果、公益法人を目指そうということになった。会報『山』には、全発言に近いものを掲載した。

横田重雄会員（12962）（会の現状を考えると一般法人でよいのではないかと思うが、重要な案件なので、採決は拍手ではなく、挙手を求め記録に残してほしい。

尾上会長 会長権限で、そのようにさせていたきたい。

臼木博信会員（12416）理事

会での結果は賛成12、反対3だったと聞いている。私は反対だ。「公益法人のほうが、格が上」といつているが、抽象的だ。①体制が整っていない、②本部と支部の関係はどうなるのか、③内閣府から従来より強い干渉を受ける、④手続きが煩雑だ。

吉永法人改革プロジェクトチームリーダー「一般は楽で公益は厳しい」などと言われるが、大変さはどちらも同じだ。いずれにせよ体制は整えていかなければならない。実は一般のほうが、手続きが大変だと思っている。日本山岳会は約3億2000万円の純資産を持つっており、一般を選択すれば、長期間にわたって、これを使い切るまでの公益目的計画を作成しなければならぬ。30年で使い切るとすれば、30年間の計画をつくらなければならない。

支部との関係は、内閣府と折衝中である。内閣府からは「支部は日本山岳会のなかの組織にしてほしい。会計も一体化してほしい」と言われている。名称を「公益社団法人日本山岳会○○支部」とするか、たんに「日本山岳会○○支部」とするか。早急に支部の方が

たと打ち合わせたい。

干渉について。いまでも文部科学省から監査を受けている。3年に1回だ。200項目にわたっての監査がある。公益でも一般でも同じ。公益だと「公益事業をちゃんとやっているか」、一般だと「純資産を使い切るまで公益目的計画通りやっているか」が焦点となる。

安間荘会員 (5576) 公益法人で進めばどうだろう。昭和3年、故秩父宮殿下の出資により、札幌市郊外に建てられたスキー小屋、空沼小屋が荒れて倒壊必至だ。日本山岳会で引き取り管理してほしい、と思っている。ほとんど無償で提供してもらえらう。こうした文化的、社会的なものを継続し管理していくのが公益法人の役割ではないか。具体的に、公益法人化の意義が見出せるのではないか。

尾上会長 北海道支部で管理するのがベターだと思う。資金調達に問題は残るだろうが、山研を運営していることでノウハウはあるだろう。相談していただければ、秩父宮記念山岳賞もあることだし、検討させていただきたい。

早田道治会員 (5626) 公益で

も一般でも、どちらも面倒なら、公益法人を選択してはどうかと、岐阜支部では話し合っている。公益法人になっていないと、一般社会は、なかなか認知してくれない。岐阜支部として公益法人への選択をお願いしたい。

尾上会長 支部の問題に関連するが、広島支部からルームのための不動産取得について、相談を受けている。

吉永チームリーダー 支部には法人格がないので不動産を所有することはできない。登記は日本山岳会となる。本部のルームを「主たる事務所」とし、支部のルームを「従たる事務所」とする方法もある。その場合、本部と支部で管理や税金の負担などについて協定書を締結する。支部が独立して法人格を持てば独自に所有できるが、日本山岳会は連合会組織となる。

* 採決に入った。挙手を求めた。総務委員が数えた。賛成75、反対9という結果となった。委任状を合わせた賛成が2分の1を超えて、第3号議案は承認される。

定款変更は「4分の3」のハードル

3号議案が執行部の提案通り承認され、今後は公益法人の申請に向けての作業に取り掛かることになる。続けて、定款の変更について協議した。

冒頭、宮崎副会長は「定款の変更には、会員現在数の4分の3以上、4000に近い議決が必要となる。今日の総会の出席者・委任状は、合わせて2244にすぎない。かなりの努力が必要となる」と協力を要請した。できないと臨時総会を開かなければならなくなる。次いで吉永チームリーダーが定款変更のポイントを説明した。

吉永チームリーダー 新しい名称は「公益社団法人 日本山岳会」となる。目的は変えない。「……登山を通じてあまねく体育、文化ならびに自然愛護の精神の高揚をはかる」は、公益法人にふさわしい。15人の理事を選任する。うち代表1人、常務理事を若干名選ぶ。

会長、常務執行理事とする。会費規定は施行細則に移す。定款の変更は大変むずかしく、会費を状況に応じて変更できないおそれがあるためだ。評議員会の位置づけも変わる。現在は名誉会員の決定、総会の重要な議題の承認、役員の

推薦などの権限を持っているが、すべてはすすことにする。今後は、会長に助言を与える役割を担う。総会は年1回となる。役員に年齢制限を設ける。具体的には理事会で検討する。「支部」については、

「支部を置くことができる。支部にかんする規定は別に定める」とし、支部規定をつくる。規定は現在22あり、これ体系化していく。

宮崎副会長 6月18日に開催する23年度第1回総会で審議するのは、定款の変更、施行細目、支部規定の3つ。承認されれば、内閣府の認定を得て、来年4月から施行される。それまでは現在の定款で運営される。その他の規定は、来年4月までに理事会で検討していくことになる。

田邊壽会員 (4618) 執行部は議事をスムーズに進めることばかり考えているのではないか。山岳会には崇高なビジョンがある、そして民主的である、こうしたよい伝統を守って、運営してほしい。

* 1号議案の平成23年度事業計画、第2号議案の平成23年度予算の審議も合わせ、約2時間半の総会を閉会した。

メテオロジ― 年末年始の山岳気象と精度が高かった予報

猪熊隆之

2008年／09年に日本山岳会で冬山天気予報の配信を開始してから、3シーズン目となった。

地球温暖化の影響もあって、日本の海水温が年々上昇し、冬山の気象にも大きく影響を与えている。

低気圧が日本列島を通過した後、すぐに冬型が強まるのが少なくなり、日本海に小さな低気圧が発生する頻度が多くなった。このことが、予報を難しくしている。

この冬の年末年始もまさに、そのようなパターンになり、事前の予想よりも山岳の天候はよくなった。そこで、冬山天気予報を発表した12月中旬から1月中旬にかけての1カ月間の中部山岳における気象特性と、天気予報の精度について報告させていただく。

気象の特徴

今年の特徴は、日本付近には断続的に強い寒気が入ったということである。

日本付近にはたびたび強い寒気が南下し、特に12月23日から26

日、30日から1月1日にかけて、1月6日、1月15日から17日にかけては、輪島の上空5500m付近でマイナス36度C以下の寒気が入り、中部山岳は北部を中心に風雪が強まった。ただし、30日から1月1日にかけては、西日本を中心に非常に強い寒気が南下したにも関わらず、日本海に低気圧が発生して、北陸地方以東では冬型がそれほど強まらなかったことや、

雪雲の流れ込みが新潟県方面と山陰地方に集中したため、中部山岳では北部でも降雪がそれほど多くなかったことがあげられる。また、ジェット気流が日本の南海上にまで南下したため、稜線の風もそれほど強まらなかった。

近年は寒気が去ると、次に寒気の来るまでの期間が長く、その間は暖かい空気が流れ込んで気温が極端に上昇する傾向が続いている。しかし、今年の特徴としては、強い寒気が襲来した期間以外でも暖かい空気が日本の南に後退したままで、寒暖の変動が比較的小さく、

平均した寒さが続いた。ラニーニャ現象や偏西風の蛇行が影響しているものと思われるが、冬山天気予報を配信した期間に関しては、久しぶりに冬らしい冬といった感じであった。

予報精度

強い寒気が流れ込んで中部山岳で風雪が強まったときは、3日から7日ほど前から強い寒気の南下を予想することができたので、いずれのときも風雪が強まることを呼びかけることができた。

しかしながら、年末年始は前述したような理由により、予想より降雪量は少なく、風も弱かった。したがって、天気予報を利用した登山者は、予想よりよい天気だと感じた人も多いと思う。ただし、荒天情報を早めに呼びかけたためか、年末年始の遭難者は非常に少なかった。

この天気予報が遭難者の減少に貢献しているのだとすれば、嬉しい限りである。

今後の課題

数値予報が発達した現在においても、山岳の気象を予想するこ

とは難しいときがある。精度向上のためには、登山者の現場からの実況を予報に反映させることが不可欠である。そのために、株式会社メテオテック・ラボで配信している全国15山域の天気予報(月額315円)では、今夏から登山者から現地の気象レポートを投稿できるサービスを開始する予定である。今後も、できる限り多く、現場からの情報を入手する方法を考え、さらに気象予報士自身が冬山に入り、経験を積むことによって、天気予報の精度を向上させたいと思っている。

日本山岳会 冬山春山天気予報 	料金 : 無料 配信方法 : メール、携帯ウェブ、PC ウェブ エリア : 3エリア 北ア北部・南部・八ヶ岳
メテオテックラボ 山の天気予報 	料金 : 315円(税込) 配信方法 : メール、携帯ウェブ エリア : 全国15エリア 利尻・大雪・飯豊・谷川・丹沢・富士山・八ヶ岳・北ア北部・北ア南部・中央ア・南ア・大山・石鎚・久住・屋久島

海外登山事情

ポーランド山岳会と日本との交流

中村 保

伝統あるポーランド山岳会

ポーランドが目標としてきた「冬季初登頂と新ルート開拓」は着実に成果をあげてきた。ネパールの8000メートル峰冬季初登頂は、ポーランド隊が大半を占めている。また、1990年にアルパインスタイルで登ったクシストフ・ヴィエリツキのダウラギリI峰東壁など、8000メートル峰の新ルート開拓も数多く、初登頂も少なくない。この時代のポーランドからの遠征は、協会が強力なメンバーを選抜して送る官製プロジェクト的な色彩が強かった。一方、自由意志で出かける本来のアルピニズムの登り方をするグループもあった。

伝統を踏襲して、近年は新たな挑戦としてカラコラムの冬季初登頂を目指している。

地道に蓄積された登山文化

ポーランドの登山文化は、海外登山という光の当たる面だけでなく、文献や地図作成の分野でも他国の追従を許さない業績が地道に

蓄積されている。日本でも知られているイエルジー・ワラさんの『カラコラム・ヒンズークシユのクロニクルおよび地図』作成と、ヤン・キエウコフスキさんの『山岳百科大辞典』がその代表である。

大辞典の第2巻目はアジア編の山名辞典で800ページにおよぶ大書である。日本山岳会、日本山岳協会、山と溪谷社の『岩と雪』の紹介もある。驚いたことに東チベット・雲南・四川のパートでは私が英文ジャーナル『Japanese Alpine News 2003特集号——チベットのアルプス』に掲載した地図17枚がクレジット入りでそのまま使われている。ここにも英文ジャーナルの価値がうかがえ、辞典編集者の幅広い見識と意欲がみてとれる。

これほどの大辞典が出版されている国は他にないだろう。ただ惜しいことは、ポーランド語で書かれているので、他の国では利用されないだろうということにある。資料作成という面では旧東欧

圏の登山家の方が熱心である。日本登山界との交流

ポーランド山岳会との交流は、1960年の京都大学学士山岳会(AACK)がヒンズークシユ、ノシャック(7492メートル)を初登頂したとき、12名のポーランド隊と遭遇したのが最初であろう。1986年には、ポーランド山岳協会のミッションが日本山岳会と交歓するために来日したが、積極的な交流は途絶え、4半世紀も空白があった。

2010年9月に初登頂50周年を記念して、登頂者の岩坪五郎さんと酒井敏明さんら14名がポーランドを訪問し交歓した。学習院の芳賀孝郎さん、賛田統亜さんも参加した。そのときのことを『山』(787号)に、芳賀さんが寄稿している。

交歓登山とその後

1986年夏、ポーランド大使館の厚意で日本山岳会とポーランドの交歓登山が実現した。アンジェイ・ザヴァダを団長とする7名の選りすぐりの登山家が来日。日本山岳会は今西会長以下総力で迎え入れ、読売新聞の協力や産業界の支援も受けて交流の成果をあげた。

シンポジウムの席でザヴァダさんは、150年におよんだ国の分割と第二次大戦後の困難な再建の歴史、ポーランドのアルピニズムについて説明した。そのなかで、自分たちのコンプレックスとしてポーランド人は8000メートル峰を初登頂していない事実をあげ、「なるべく国際的に効果のある登頂を狙おうと決めました。必ず新しいことをやること、他の国がたどったルートには行かない」と語り、ポーランドの目指すべき道筋を示唆した。そのときの彼の発想は、その後のポーランド隊の記録で実証されている。

松田雄一さんによると、ポーランド側はお世話になった返礼に、「次はポーランドで交流登山をしたいからぜひ来てほしい」と、日本山岳会に要望したが実現しなかった。ポーランドのクライマーの実力に太刀打ちできるメンバーは集まらないだろうと尻込みしてしまっただけ。

その後、交流は個人ベースの登攀で2001年に山野井泰史さんとクルティカが、カラコラムのビヤヒラヒ・タワー(6000メートル)をペアで登った記録がある。

エコロジー

森林環境を形成するもの——
生態学六講座と野外活動

橋村一豊

2010年10月、C B D I C O P 10 (第10回生物多様性条約締約国会議) が名古屋市中で開催された。愛知県では、N P O、企業、地域団体、学校などに呼びかけ「パートナーシップ・イベント」を募り、C O P 10を盛り上げようとした。

東海支部では、国土緑化推進機構との共催で、瀬戸市と中日新聞の後援を得て、第一事業(生態学六講座)、第二事業(森の音楽会)、第三事業(幼稚園児の森林体験)として、これに参加した。

なかでも4月に始まった第一事業の生態学六講座が最も注目された事業で、集客・動員数も600名を超えた。この第一事業は日本のアマチュア・フォレスター向けとしては空前の切り口で、6人の学識あふれる講話は聴衆を魅了した。

ここでは第一事業の基本的な考え方を概説し、開催に至るまでの経緯を報告したい。

生態学者による生物間相互作用

用と共生についての自然環境、森林生態系、生態系サービス、生物多様性、共生など一括される概念は、木を見ているだけでは理解できない。森の木を餌場や巣にする生物がいて、それらが食物連鎖で物質循環につながり、生態系を形成している。生態系のなかでは、生物どうしの、あるいは種間での働きかけ(生物間相互作用)が共生を育み、あるいは競争や食害も行なわれつつ、多様性に富む森林環境が形成、維持されている。

一例をあげれば、ドングリを運ぶリスがいなければ木の芽は出ない。ハチが訪花送粉しなければ、木は実を結ばない。日本の樹木の7割は根に菌根菌を宿し、木は菌に糖分を与え、菌は木に広く集めた栄養塩類を渡す。木が光合成した糖分の7〜30割は菌根菌が取る。このようにして相利共生が成り立っている。菌根菌のことを知らない

いと、木のことはわからず、ただ選別し、分類記帳して終わりとなる。

このように森の生物多様性を知るには木のサイドからの見方だけでなく、森に依拠する生物の側からも知る必要があるのではないかと私たちは考えた。

そして一昨年年末、私は東北大学に中静透教授を訪ね、この考えで講習をお願いできないだろうか」と問いかけたところ、O Kが出た。次いで、私がおそろのおそろの提示した5人の先生のリストにも、O Kが出た。遠路、仙台へ来た実りがあつたのである。その後、私は講演いたただく全員の先生の研究所を訪ねたが、中静先生の名をだすと、どの先生も即答でO K、当学界における中静先生の信任の厚さを知った。

「日本でこれまでに、アマチュア・フォレスター向けにこの切り口からの講演会はあつたか」と問いかけたところ、「初めて。だからやりがいがある」というのが先生方の答えであつた。

また、それぞれの先生が1日を費やして猿投の森へ足を運ばれ、



猿投の森で講義する中静教授と講習生

下見をされた。先生方の森を歩く後ろ姿を見て、私はこの6回講習の成功を確信した。

支部員・支部友・猿投の森づくりの会の会員など、延べ100名を超えるサポーターの努力が実り、この困難な仕事を大成功に導くことができた。事業責任者として深く低頭してお礼を申し上げたい。また、山岳会会員個人として多額の助成金を賜った人もあり、併せて深謝したく思う。

なお、各講座の写真と速記に基づく講義録は、2011年2月から3月に上梓される予定である。

ヒストリー

空沼小屋(秩父宮ヒュッテ)の憂える現状(続)

安間 莊

有形文化財としての価値

北海道大学大学院教授で札幌市文化財保護審議会会長の角幸博氏は、空沼小屋の価値について、登録有形文化財になり得る価値を十分有する歴史的建造物であるとのように紹介している。

積雪寒冷地に建つ特徴ある施設である。日本におけるスキーヒュッテを専用小屋として新設する機運は1929年以降である。しかし、北海道ではすでに1926年、ヒンデル設計によるティネパラダイス・ヒュッテが竣工されており、ヒュッテ建設機運に大きな影響を与えた。

空沼小屋は、秩父宮家から下賜された費用によって建設された山小屋であるが、第二次世界大戦後、秩父宮家より北海道大学に寄贈された。秩父宮家は、北海道のみならず日本のスキー文化とも関連が深く、1930年から毎年行なわれている宮様スキー大会開催もこの縁である。ヨーロッパ・アルプスでの登山、スキーに親しまれ

た故秩父宮殿下にとつて、粉雪の林間滑降は、つかの間の開放感あふれた至福の時ではなかったかと思われる。

ヒンデルの残した珠玉の一品

設計者のマックス・ヒンデルは、1924年に来道したスイス人建築家で、北海道でプロフェッショナルを強く意識した自営建築家の魁の一人である。1927年に横浜に本拠を移し、1935年まで在日外国人建築家として活動した。代表作として現存作品に、札幌の北星学園女教師館、函館の天使トラピストヌス修道院、新潟カトリック教会、東京聖母病院、上智大学校舎、宇都宮カトリック教会などがあげられる。

空沼小屋は、小規模ながらヒンデルが故国スイスに想いを馳せながら伸びやかに、楽しげに腕を振るつたヒュッテ三部作の一つとして、北海道近代建築史上貴重な歴史的建造物として残されるべき珠玉の一品といえる。

さらに、北海道における戦前期

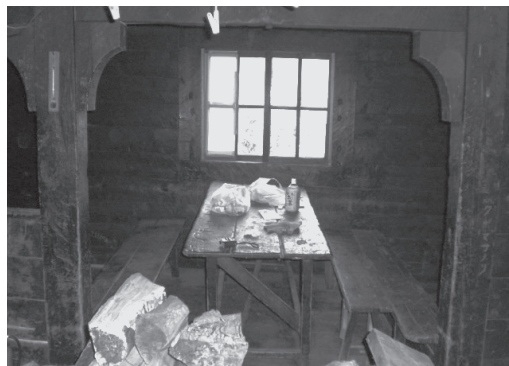
のログ工法の数少ない実施例であること、札幌市民に長年親しまれてきた山小屋建築であることなどがあげられる。この歴史的建造物に有する風格、雰囲気、空間の豊かさなどは、市民や学生がふれることのできる貴重な資産である。

存のための基金と活用のアイデアを募っている。

これまで保存運動は、所有者である北海道大学に現地での修復保存と利用を要望するという形で行なってきた。しかし今のところ、はかばかしい進展は見られない。日本のスキー界、山岳界、建築界その他各界関係者が合い携えて、修復保存の運動に取り組んでいく必要があると考えている。

緊急に補修を要する空沼小屋は、日本近代建築史だけでなく日本のスキーおよびスキー登山文化史の貴重な遺産であり、登録有形文化財に値する建造物である。

空沼小屋をむぎむぎ倒壊消滅させてはならないと、2009年11月、有志による「空沼小屋の保存を考える会」を立ち上げ、保



チェーンソーによる削り跡が生々しい空沼小屋の内部

空沼小屋は、国有地(林野庁より借地)内で、かつ国立公園第一種特別保護地域内にあり、利用上のさまざまな制約がある。諸機関相互で調整すべき点も多い。これからは大学という枠に限定しないで、広く各界の意見、支援を求め、保存と利活用の具体的な方策をまとめていきたいと考えている。

＊「空沼小屋の保存を考える会」代表 安間 莊、顧問 三浦雄一郎、平山善吉、岩坪五郎、堂本暁子、事務局 〒005-0832 札幌市南区北の沢3丁目12-13 照井康穂建築設計事務所内 TEL 011-211-4005 FAX 011-211-4006

✉ soranuma@googlegroups.com/

N — 東 西 北 — — 南 南 北 — S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

横有恒の署名本

雁部貞夫

数年前、信州に滞在中に立ち寄った古書店で、たまたま数点目にした山岳書のなかに『山行』（大正12年7月刊、三版）があり、その表紙見返しに著者である横さんの毛筆による署名と漢詩4行が端正な文字で記されていた。

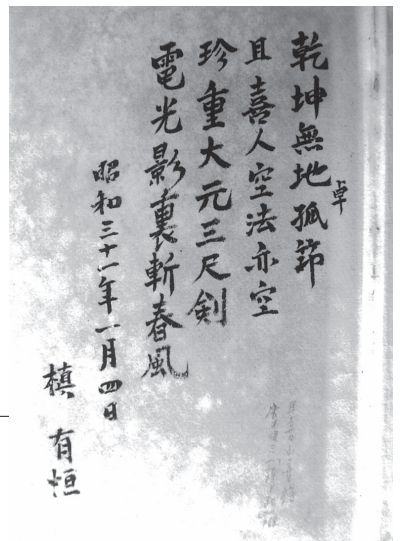
保存の状態もよく、値段も数千円なので、即座に購入した。初版も同じ年の6月末に刊行、三版が出たのが7月初めであり、ひと月たたないうちに3度も版を改めて刊行されたので、いかに反響が大きかったかが偲ばれる。

さて、問題は、横さんが記した「漢詩」である。ここにその筆跡をあげるとく、七言の四行詩、すなわち七言絶句の形式をとって

いるが、いつの時代の、誰が原作者なのか、それが謎である。内容と考え合わせると、私が高校教師の時代に何十年か教えていた「唐詩」の感じではない。

詩句のなかの「三尺の剣」や「春風を斬る」というあたりは、むしろ、南宋亡国の抵抗の詩人であった文天祥などの口吻に似ている。そこで宗末から明初にかけての詩人たちの詩文を調べてみると似た詩はいくつかあるが、ぴつたりと符合する作品に行き当たらず、出典調べはしばらく頓挫してしまつた。

ある時ふと私は、次のようなことを思いついた。この詩文は、横さんが日ごろから座右の銘のようにして親しんでいたものに違いない。日本でも「五山文学」と呼ばれているなかに、禅宗の僧たちがこうした気力の横溢した詩句を残している。おそらく鎌倉期の禅僧



横有恒の毛筆による漢詩がある『山行』の見返し

の誰かの詩文ではないかと考えた。紆余曲折のうちにたどり着いたのが、鎌倉の円覚寺の開祖となった無学祖元の存在である。実はこの中国から渡来した高僧の「偈」に、この詩文があつたのである。

この詩の「偈」は、祖先がかつて、元の兵に白刃を首に擬せられた時のもので、生への執着を離れることは、同時に死の恐怖から離れることでもあるという、生死一如の境地を示した「偈」であろう。

横さんの生前、何度か交わした会話から受けた落着いた謙虚な態度と同時に腹のすわった人だという印象は、この「偈」と何か通じ合っているようにも思うのである。

次に、この『山行』の前所蔵者についてふれてみたい。その人は、

会員の山下久男氏（故人）である。深田久弥没後まもなく、『深田久弥の追悼』（1971年11月刊）を編んだ方で、元々は民俗学の研究者であつた。その回想集は深田さんの近親の人々、友人知己の、多くの文章を収めた貴重な資料であり、数年前には復刻もされた。

この『山行』のうら表紙の見返しには、山下氏の当時の住所氏名が捺され、その脇に1927（昭和2）年6月9日に入手した旨の記入がある。

山下氏は慶應大学の出身で横さんの後輩。おそらく、昭和31年の年頭に茅ヶ崎の横邸へあいさつに行かれた際に、この本に横さんの署名と無学祖元の「偈」を書いていただいたのであろう。

昭和31（1956）年という年

は、横さんにとっても日本の山岳界にとっても特別の年である。この年の5月9日に横さん率いるマナスル登山隊(第三次隊)が、その初登頂に成功したのであるから。

この本に署名した1カ月後に横さんは神戸港から本隊総勢8名でイギリス船・サンシア号で出港する。私にはマナスルへ出発する直前の横さんの覚悟のほどが祖元の「偈」に託されて、惻々として伝わってくる。

マナスル登頂の年の暮れに、もう1冊別の本に横さんが署名したものを私は所蔵している。『マナスル写真集』(依田孝喜・編、昭和31年11月刊)である。本の表紙裏には、マナスルの第一キャンプ

(高度5000^{メートル})から本峰を望む写真の印画が貼られ、そこには昭和31年12月と自署し、さらに献呈者の氏名として「中山睦子様」と記されている。おそらく後援者か山岳関係者のご家族であつたかと推察される。

なお、『マナスル写真集』の発行者である岸哲男氏(当時は毎日新聞社出版部・故人)は、別にマナスル登山の正式報告書『マナスル』(二巻、1954年および1958年)も編集。岸氏は長年にわたり、茅ヶ崎に居住し、散歩中によく横さんに会つたと語っていた。また、岸氏はアララギの先進で、中村憲吉門の高弟でもあつたが、数年前に亡くなった。

短歌

晩秋

四十年鑑識官の償ひに献体すると君の遺言は

君と登りし最後の山の北穂高 凜凜しき瘦身の写真のありき
懐に温めくれしワンカップ旨かりしこと北穂高の山に

山鳩のしき鳴く森を抜け出でてにはかにひとつ思ひ揺らげり
辿り着きし源流は深きブナの森のちの水は苔に滴る

風が鳴る 木の実が落ちる紅葉舞ふ 森の小径にわれも秋の子
眠りに入る森の終章かはらと樹樹はまっ赤な音符を飛ばす

谷口敏子

活動報告

自然保護委員会

ヒマラヤ氷河調査報告と今後の展開

大森弘一郎氏による主題の報告が行なわれ、自然保護委員会、科学委員会、やま学研、山の自然学クラブの会員が参加した。

大森氏は、ゴジュンバ氷河のターミナルを主として歩きながら、氷河のターミナルを見、またキャンプの航空写真を撮ってきた。特に氷河について、池のレベルで調査して、GLOF(氷河湖決壊洪水)を防ごうというのが今回のテーマである。

内容は多岐にわたり、まとめるのが困難であつたが、テーマを筆者自身が興味を持てるものにしぼると、次のようなことであつた。

①シッキムの氷河湖である「チヨゴ湖」が崩壊し、ヨクサム村が壊滅したことがあつた。その現場

を見た体験を聴いた。

②ゴジュンバ氷河やクーンブ氷河は、広大な涵養域があつて、氷河湖が形成される可能性がある。ここを池のうちに調査して、対策をとるという考えはよい。

③ヒマラヤの氷河と湖を調べるとJAXAの衛星写真は有効で、調査の糸口になる。ハザードマップの作成ができるとよい。また、これらの場所は標高が5000^{メートル}ほどなので、空撮も可能である。海洋開発研究機構の矢吹さんが参加していて、有用な意見を見ただけだ。

GLOFの対策を池発生の段階でやるう、という提案は検討に値する、と感じた。(大船武彦)

図書委員会

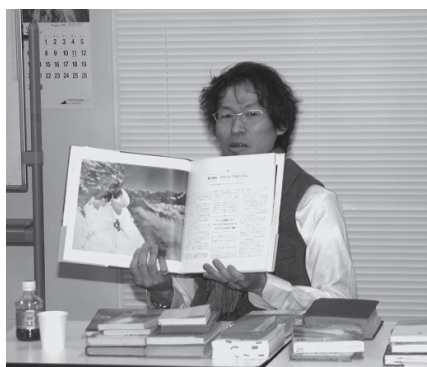
竹内洋岳さん本を語る

1月31日、8000^{メートル}14座登頂

日本山岳会の各委員会、同好会の活動報告です

に最も近い竹内洋岳さんを招いて、「40回 山岳図書を語る夕べ」が開かれた。テーマは「僕と山の本」。JAC-YOUTHのメンバーが聴講したこともあり、竹内さんからは本の話だけでなく、時折「もっと海外の山に行こう」というメッセージも送られた。

竹内さんの話のなかで興味深かったのは、ある本と対になる本をセットで読むということ。ジョセフ・コンラッド『闇の奥』と藤永茂『闇の奥』の奥、ジョン・クラカワー『空へ』とアナトリ・ブクレイエフ『デス・ゾーン』、新田次郎『八甲田山死の彷徨』と高木勉『八甲田山から還ってきた男』など。著者によって異なるメッセージがあり、ひとつの題材を違っ



本を手に内容を語る竹内さん

た視点で読むことができるおもしろさがあることを教えてくれた。

もちろん、山の本も多数紹介。レッドカパーブックと呼ぶジャン・キルコフスキーの、ヒマラヤ高峰などを取り上げているガイドブックについて、「この本で、線が引いてないところはまだ登られていないところ。非常にイマジネーションが膨らむ、本当におもしろい本」。

ダグ・スコット／アレックス・マッキンタイア『シシャパンマ』については、「野心的な登山だったとは思いますが、彼らにとっては第一に楽しかったんだらうな、ということが伝わってくる。翻訳してほしい一冊」。

『ヒマラヤアルパインスタイル』については「いつかこういう登山をしたいなと思わせる本」としつつ、その前書きについて「登山について自分が思っていたことがそのまま書いてあった」と話している。

ヘルマン・ブール『八千米の上と下』やジャン・コスト『アルピニストの心』など、古典的な本も紹介。とくに、『八千米の上と下』の舞台となるナンガ・パルバットに

ついては、「日本からもっとも近い8000m峰ではないか。夏休みを使って十分行くことができるから、もっとナンガに行ったほうがいい。おすすめの山」と力説した。

竹内さんが最後に紹介したのが、「ここ数年来でいちばんおもしろかった本」で、南条直子『戦士たちの貌』。多くの本は、読み手がおもしろく感じることを意図して書いてあるものだが、この本は、「文章を勉強しなくても、心を込めて思ったように書けば伝わるんだ」ということを教えてくれた」という。塩野米松『初代竹内洋岳に聞く』で、本を読む側から作る側も経験した竹内さん。紹介されたのは山岳図書にとどまらず、竹内さんの読書範囲の広さをうかがわせる講演内容だった。

（阪辻秀生）

アルパインスケッチクラブ

「山好きの山の絵展」開催と創立20周年記念祝賀パーティ

アルパインスケッチクラブは、今年、創立20周年の記念の年を迎えました。

この記念すべき年に、会長・副



記念祝賀パーティであいさつする尾上会長

会長ほか多数の方々を迎え、2月19日、銀座・交詢社で創立20周年記念パーティを開催しました。また同時に2月20日から26日の間、クラブ員有志による「山好きの山の絵展」を、有楽町交通会館2Fギャラリーにおいて開催しました。作品66点、スケッチブック15点を展示し、会期中1889人の来場者がありました。

また同時にB1エメラルドルームにおいて、会員各位の思い出の作品展を開催し、ともに盛況のうちに終えることができました。

（田邊壽）

支部

だより



全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

福岡支部

『白き氷河の果てに』上映会

支部では恒例の新年会を兼ねて1月22日、「岳人のつどい」を福岡県太宰府市の大宰府館・まほろばホールで開いた。

今年の内容は例年の講演会とは若干趣向を変えて、本部が所蔵する「山の映画」の上映を主にするという事で、1977年K2日本人初登頂の長編記録映画『白き氷河の果てに』の上映会を行なった。九州登山情報センター(山の図書館)に後援、福岡県山岳連盟と福岡県勤労者山岳連盟に協賛をいただいたうえ、他支部や他山岳団体、一般の登山愛好者にも広く参加を呼びかけた結果、124名が集まり大盛況だった。

当日は14時に開会。まず副島勝人支部長のあいさつがあり、会の活動の現状報告と「新入会の呼び



副島勝人支部長の「乾杯の音頭」前のあいさつ

かけ」が行なわれた。この日の特別ゲストは重廣恒夫氏(日本K2登山隊サミッター、日本山岳関西支部長)。同氏の、映像を駆使しての丁寧な映画解説につづいて、『白き氷河の果てに』(カラー、123分)の上映に入る。

映画は、難しさでは世界一といわれるパキスタン・カラコルムのK2峰(8611m)に挑んだ日

本隊の苦闘を撮影記録したもので、隊長、副隊長をはじめ福岡から参加した隊員が多かったのも好評のひとつだったと思われる。

映画のなかで、ついに日本人初のK2登頂が成功した瞬間と、上映が終了した時には、会場全体から大きな拍手が起り、まさに映画と会場が一体となったイベントだった。

上映会終了後、17時30分から同じ会場で、「岳人のつどい」新年会(懇親会)が開かれ、67名が出席。映画でも登攀リーダーとして紹介された副島支部長の乾杯の音頭で宴に入り、地元在住の当時の登山隊関係者や支部会員、登山愛好者たちがそろって、新年を祝い山の話に花を咲かせた。

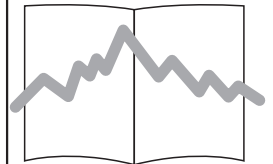
途中、支部会員の近著、『九重山法華院物語・山と人』(松本恒夫、梅木秀徳・編)、『屋久島・白谷雲水峽と白谷川』(太田五雄・写真と文)の2冊が紹介され、著者の松本恒夫氏と太田五雄氏が、それぞれコメントされた。

また、この「つどい」の後援や協賛をして支えてくださった九州登山情報センターの重藤秀世理事長、福岡県山岳連盟の足達敏則会

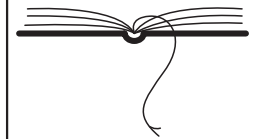
長などからもごあいさつをいただいた。

さらに、K2登山隊の報道隊員として活躍した松尾良彦氏(元西日本新聞記者・会員)からは、当時の思い出話を語ってもらった。そして、懇親会が大いに盛り上がり、19時すぎ、楽しい語らいが終了した。

(高木莊輔)



図書紹介



『北海道の登山史』

安田 治・著



2010年12月
北海道新聞社刊
A5判 360頁
定価 1890円

北海道の岳人にとっては待望の書である。日本の近代登山の発展は、西欧文化のアルピニズムの影響を受けたとしながらも、日本古来の山岳信仰も解きあかし、現在に至るまでの進展を、国の内外の事項を織り交せてわかりやすく述べている。

著者は北海道勤労者山岳連盟会長で、当会で毎年「北海道登山研究集会」を開催。本書は、その論文・報告書に連載したものをまとめたものである。

「目次」を略記すると、第1章「近代登山史以前の山」では、山岳崇

拝の出現、信仰登山の発達、探検時代の蝦夷島の情勢と内陸山岳の探検登山、在日外国人による近代登山の始動、陸軍参謀本部陸地測量部員による測量登山。

第2章「近代登山史Ⅰ」では、近代登山の草創期と日本山岳会の創立、北海道における近代登山の草創期、大学山岳部の冬山挑戦、「山とスキー」の発行と北のパイオニア、近代登山の黎明期を支えた山案内人、我が国初の岩登り。

第3章「近代登山史Ⅱ」では、戦中・戦後における山岳団体の動向、ヒマラヤ、ヨーロッパアルプスへの挑戦、北海道各山域における登山、北海道の山における大規模な山岳遭難死亡事故、中高年の登山ブームと若者の登山離れ。

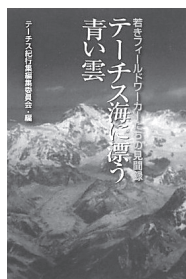
著者は、最近の「山ガール」ブームをとらえ、それを一過性にせずに登山離れを防ぐ切っ掛けになればと、未来を見据えている。

最後に日本登山史上の記録を含めた「北海道の登山史年表」は、7世紀から平成22年までの初登山記録を山岳団体や人名が記述され、それが119ページにもなっていて極めて貴重な史料である。

「あとがき」には、北海道の登山史を日本の登山史の流れを把握しつつとらえている。本書によって北海道の登山文化を継承し、発展させる上での一助となれば幸いである——と、次世代に期待を寄せている。

(高澤光雄)

テーチス紀行集編集委員会・編
『テーチス海に漂う青い雲——若きフィールドワーカーたちの見聞録』



2011年1月
刊行
A5判 570頁
定価 5000円

本書は北大を中心とした、地質、鉱物、動物、植物、医学あるいは教育を専門とする少壮の学徒と研究者たちが、1963年から1990年まで、ヒマラヤ山脈、カラコルム山脈、チベット高原や天山・崑崙山脈での調査旅行の報告書に

書いた紀行、エッセイ、回顧録など31編が年をおって収録されている。

外貨事情など海外渡航も自由にできない時代、物資も乏しい時代にであったにもかかわらず、全編に若者たちの未知への憧れと一次情報を収集し、分析しようとするフィールドワーカーの熱気がみなぎる。悲壮感はいくつもみえない。楽々と笑いがあり、ペースがある。登山活動、地質調査、植物調査とそれぞれ目的は異なっているが、それらの活動は、学術的な研究成果のみならず対象地域の社会開発に貢献、発展していったものも多い。ほぼ半世紀前に書かれたものであり、現地の社会情勢や自然環境すら変貌している現在でも、調査活動の様子や地域の人たちとのふれあいが今も伝わってきて、彼らの旅は輝きを失っていない。それどころか新鮮さを増しているといえる。それは、近年失われがちな「フィールドワーク」が行間にも息づいているからだだろう。

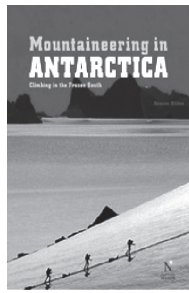
これらの紀行、エッセイは当時の若者たちの人間的記録として、後世の若者たちへ伝えるメッセージともいえる。

巻末には詳細な「テーチス協会（テーチス地域自然史研究会）年譜」「テーチス協会会員によるヒマラヤ地域学術調査年表」と同協会の「出版資料」が収録されていて、北大山岳部の人材の幅広さと奥行きを知ることができる。

なお、テーチス海とは、古生代後期（2億数千万年前）に存在した大海で、アルプスからヒマラヤの造山帯はテーチス海の消滅した跡であるとのことである。

（松澤節夫）

Damien Gildea・著
『Mountaineering in ANTARCTICA:
Climbing in the Frozen South』



2010年11月
Editions Nevicata刊
B4変型判 192頁

日本で市販されている世界地図を見る限りほとんどの地図で南極は白一色に塗りつぶされている。そんなこともあって、南極はすべてが氷雪に覆われているような印象を受けていた。

ところがこの書物で、登山者の

立場から南極を見た場合は、極地のあちこちに多くの4000mを超える高峰が散在し、しかもアイスクライミング、ロッククライミング、ミックスクライミングなどの対象になる峨々たる山々や針峰、大岩壁、海上に突き出た尖塔があることを知り、南極のイメージが大きく変わった。まだまだ未開発の地域や未踏峰の宝庫である。

目次を6章に分けて解説し、各章に関連の探検や登山史、エピソードなどを記している。巻末に4000m峰とその衛星峰の一覧表、山名と人名索引があり、読者には便利だ。特に山名にいたっては900ほどの山名が掲載されており、南極にいかにも多くの登山対象になるピークが存在するかを物語っている。

45人から提供を受けたという写真も含め160余枚が掲載されている。この魅力的で美しい写真を眺めるだけでも楽しく、極地の山々を知ることができる。

昨今、七大陸最高峰登山ブームのあおりで最高峰がビンソン・マシフ（4892m）であることを知る人は多い。しかし、ビンソン山塊は南極の山並みの一つに過ぎ

ない。

この一世紀の間にシャクルトン、ティルマン、ヒラリー、ボナティ、メスナーなどとも南極の魅力に惹かれて出かけた。南極の個々の探検や登山、科学者達の極地研究報告書などはたくさん出版されたが、南極全域の登山を対象とした書物はなかったようだ。

この著書は珍しく南極全域を登山の視点から紹介している。著者は2000年から08年にかけて南極を10回訪問している。そして最高峰ビンソン・マシフ登頂やクライミング、さらにスキーで極点訪問のガイドをするなどオールマイトの登山家だ。巻末の「山名索引」では700の峰をリスト・アップし、各章で膨大な山々を紹介している。

また、1817年から1998年にいたる180年間の南極における初登頂を、『The Antarctic Mountaineering Chronology』として1998年にまとめ、刊行している。

（南井英弘）

図書受入報告（2011年2月）

著者	書名	ページ/サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
A・エーラル (著) 秋山康男・他 (訳)	ジョン・ラスキンと地の大聖堂	359p / 22cm	慶應義塾大学出版会	2010	訳者寄贈
二見隆久・福成照夫 (編)	槍平雪崩遭難事故報告書	170p / 26cm	徳島岳人倶楽部	2011	発行者寄贈
Jamieson, Peter	Auldjo—A Life of John Auldjo 1805-1886	244p / 24cm	Michael Russell	2009	購入
Marshall, Robert	K2—Lies and Treachery	232pp / 23cm	Carreg	2009	購入
Worster, Donald	The Life of John Muir—A Passion for Nature	535p / 25cm	Oxford University Pr	2008	購入
Viesturs, Ed・Roberts, David	K2—Life and Death on the World's Most Dangerous Mountain	342p / 24cm	Broadway Books	2009	購入
Smith, Ian (ed.)	Edward Whymper's London Diary 18	241p / 25cm	London Record Societ	2008	購入
Afryki, Gory	Wielka Encyklopedia gor I Alpinizmu (V)	424p / 25cm	Stapis	2010	W.Heichel氏寄贈



堀田弥一（ほった・やいち）

立教大学山岳部OB

1909年 富山県に生まれる

1927年 立教大学入学

1929年 厳冬期五龍岳、唐松岳初登頂

1930年 日本山岳会入会（会員番号1231）

1930年 唐松岳～不帰～白馬岳積雪期初縦

走、鹿島槍ヶ岳冬季初登頂

1931年 槍ヶ岳～穂高岳～ジャンダルム冬

季初縦走

1936年 ナンダ・コート初登頂（日本人初

のヒマラヤ遠征）

1954年 マナスル第二次登山隊隊長を務め

る

1980年 名誉会員に推挙される

著書に『ヒマラヤ初登頂』がある

山岳会のご長老・堀田弥 一名誉会員を偲ぶ

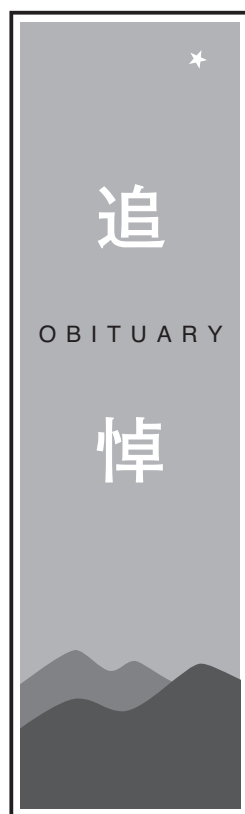
今村千秋

日本初のヒマラヤ遠征「立教大学ヒマラヤ踏査隊」の隊長として、インド・ヒマラヤの未踏峰ナンダ・コート（6867¹）に初登頂した堀田弥一氏が、2月23日ご逝去された。102歳だった。

1927年、立教大学山岳部に入部。主に立山から剣、鹿島槍などの後立山へと通いつめ、雪崩の

恐れから誰も入らない積雪期の黒部や後立山連峰、槍・穂高連峰での初登頂や初縦走など、多くの足跡を残された。この集中した3年間の冬山生活の経験が、ヒマラヤ遠征の原動力になったという。

ドイツ隊の「カンチエンジュンガの記録」を参考に、ヒマラヤへの夢を実現すべく活動する。35年の冬、鹿島槍ヶ岳で外国隊が採用していた極地法を初めて実施。また、強風に強く居住性のよいカマボコ型のテントを考案するなど登



山用具の改良にも積極的に取り組み、日本人初のヒマラヤ遠征に向けて準備を進めた。しかし、現地の情報収集や地図の入手などすべてが初めてのことであり苦勞の連続であった。

堀田氏は、「日本の冬の雪山で育った僕は、日本の山でこれだけ出来るのだからヒマラヤでも登れる」と思っていた。しかし、ヨーロッパの山の経験もないものがヒマラヤに行つてうまくいくものかと妨害もされ、準備は内輪で進めた。当時はヒマラヤという地域自体がよく理解されておらず、まるで唐天竺へ行くかのように思われたものだ」と、当時の苦勞を語っていた。そして36年秋、「立教大学ナンダ・コート遠征隊」の隊長として6867¹の未踏峰に全員登頂という偉業を成し遂げた。これは戦前唯一のヒマラヤ遠征・登頂であり、日本の登山界に新志位時代をもたらす画期的なものであった。

64年には、日本山岳会の第二次マナスル登山隊の隊長も務めた。

2009年3月21日、堀田氏の「100歳をお祝いする会」を開催し、立教大学総長や日本山岳会の宮下会長（当時）など多数の関

係者の方にご参加いただいた。この時、堀田氏はお礼のあいさつの際、背筋をピンと延ばしマイクを片手に、学生時代の思い出やヒマラヤの話などを熱く語られた。その後、参加者との歓談の輪がえんえんと続き、最後に会場前の芝生で、さまざまなグループが堀田さんを中心に記念撮影を行なった。

堀田氏が亡くなられた後、ご遺族の方から「あの会では親しい懐かしい方々と本当に久しぶりに会い、話ができて楽しかった」といつも話されていたと伺い、肩の荷が下りたような気がしている。



平成22年度第10回(2月度)理事会
日時 平成23年2月9日 18時35分～21時

場所 日本山岳会 会議室

【出席者】尾上会長、神崎・宮崎・藤本各副会長、成川・岡部各常務理事、太田・堀井・相馬・山川・野沢・永田・萩原各理事、深川・平井各監事、近藤・酒井・森各常任評議員

【委任】谷川・中山各理事

開会にあたり尾上会長から、法人改革については1月度の理事会で理事会としての結論を得た。3月12日(予定)の総会に諮り承認をいただきたい、新しい定款(案)を6月の総会に諮り検討・協議をいただき、承認を得て移行手続きに入りたいとの挨拶があった。また、先週行なわれた全国事務局担当理事会については、会員の高齢

化や新公益法人への対応等本部・各支部共通の問題について活発な意見交換ができた意義な会議であったとの感想が述べられた。

審議に先立ち、4つのプロジェクトチームからそれぞれの活動進捗状況についての説明、報告とそれらに対する意見交換が行なわれた。

また、審議終了後、新法人移行PTが検討してきた定款、同施行細則、規程類及び財務管理等について今後審議・検討すべき問題点、留意点に関して藤本副会長から説明が行なわれた。今後理事会において鋭意議論、審議していくことが確認された。

【審議事項】

1・平成23年度事業計画(案)(宮崎)
平成23年度事業計画(案)について事業計画の主なる事項について説明があった。(承認)

2・平成23年度予算(案)(岡部)

平成23年度予算(案)について、会員減少に伴う厳しい予算案ではあるが効率的運行に努めたいとの説明があった。(承認)

3・平成22年度後期海外登山助成(萩原)

平成22年度後期海外登山助成については3隊の申請があり1月21日に海外登山基金審査委員会において、①Japan Denali Exp.2011隊(カヒルトナピークからのカシリンリッジ継続登攀ほか) ②Giri Boys Mt.Edgar Expedition 2011(マウントエドガー 6618m 南東壁新ルート登攀)について審査し、両隊について後期助成対象登山隊として、各隊に25万円の助成をする。(承認)

4・日本山岳遺産基金への協力(宮崎)

継続審議となっていた山と溪谷社から同社創業80周年記念事業として「日本山岳遺産基金」創設に伴う協力依頼があった。(承認)
5・NPO法人富士山測候所を活用する会団体加人願(宮崎、堀井)
NPO法人富士山測候所を活用する会から団体会員として、同会を支援願いたいとの依頼があった。

た。(承認)

6・ロゴマーク使用願(宮崎)

宮城支部から平成23年度全国支部懇談会開催の際、参加会員に対し配布予定の記念品にJACロゴマーク使用許可願いが2月4日付であった。(承認)

【報告事項】

1・平成22年度第4回評議員会開催通知(宮崎)

財団法人自然公園財団から2月2日付で2月22日に第4回評議員会開催通知があった。

2・「白瀬蘆中尉と西堀榮三郎の南極探検」企画展の案内(宮崎)

一般法人「人生にロマンを求める会(代表理事、西堀峯夫)」から1月23日付で企画展とオープニングパーティ出席案内があった。(開催場所は東京大田区鶴の木故西堀榮三郎邸)

3・文部科学省の実地検査(宮崎)

文部科学省スポーツ課から実地検査の事前調査作成提出依頼が1月24日付であった。

4・日本山岳協会の創立50周年記念祝賀会(宮崎)

1月15日開催され当会からは会長、各副会長および各常務理事

が出席した。

5・秩父宮記念山岳賞受賞祝賀会 報告(宮崎)

2月5日開催され会長が出席した。

6・冬山天気予報実施報告(野沢)

携帯メールで見ることができ
る冬山天気予報についての利用者
(登録者)は2034名になった
(昨年同期は約1000名)。従来
からも好評であり今後も継続して
実施していく。

7・東京都山岳連盟の第9回總會 招集通知(宮崎)

1月27日付で招集通知があつた。

8・平成23～24年度役員候補推薦 依頼(宮崎)

東京都山岳連盟から1月27日
付で役員(理事・監事)候補の推
薦依頼があつた。

「諏訪事務局長 退職」

総務担当理事

当会事務局長の諏訪肇さん
から1月末、「一身上の都合で
退職したい」と申し入れがあり、
常務理事会はこれを受理した。
諏訪さんは公募に応じ、昨年10
月、事務局長に就任していた。

9・平成22年度スポーツコーサ ミット開催連絡(宮崎)

文部科学省(スポーツ・青少年
局長)から1月24日付で開催参加
の案内があつた。

10・2010「植村直己冒険賞」 の発表(宮崎)

2月16日に受賞者の発表があ
る。

11・会報「山」2月号編集報告(神長)

ルーム日誌 2月

1日 スケッチクラブ

2日 常務理事会 集会委員会

3日 フォトビデオクラブ

4日 総務委員会

5日 支部事務局担当者会議

7日 総務委員会 高尾の森づく
りの会

8日 スケッチクラブ スキーク
ラブ

9日 理事会 総務委員会 休山
会 山想倶楽部

10日 山の自然学研究会

11日 評議員会

14日 会報編集委員会 スキーク
ラブ 九五会

15日 山岳研究所運営委員会 総
務委員会 00会

16日 三水会 山岳地理クラブ

つくも会

17日 科学委員会 青年部

18日 総務委員会

10日 SUN燦会 みちのり山の
会

21日 総務委員会 資料映像委員
会 山の日制定PT

22日 インターネット小委員会

千葉支部 緑爽会 ゆき
わり会 スキークラブ

23日 自然保護委員会 麗山会

24日 01会 山遊会

28日 支部活性化PT JACI
YOUTHPT

2月来室者535名

■会員異動(2月)

物故

有木 功(2511) 10・12・30

田原善治(3494) 11・2・6

川崎 巖(5523) 11・1・31

高田健夫(5909) 11・1・5

柏木宏信(9075) 11・1・24

高柳清美(9898) 11・2・15

妹尾幸雄(10610) 11・2・3

田辺 治(11805) 10・9・29

中島 龍(13304) 11・2・21

退会

小林 栄(5986) 信濃

渡辺正弘(7443) 越後

森田勇造(8844)

佐藤芝明(10648)

西村尚和(10717) 富山

藤田和司(11603)

岩館公子(11922) 岩手

三浦陽一(12074)

山本利伎子(12164) 岐阜

塩田重美(12365) 福岡

青名畑幸彦(13160) 岩手

飛田和夫(13519)

林原隆二(13579)

樋口和洋(13694)

渡辺 昌(14171)

佐藤英治(14323) 関西

INFORM

インフォメーション



◆伊豆大島探索山行のおしらせ

科学委員会

春恒例の探索山行は、今年、大爆発から25年経った三原山噴火口の現状と火山植生を訪ねます。解説は火山学の専門家・福岡孝昭立正大教授、植生は末広坦森林インストラクターが担当します。

日時 5月28日(土)～29日(日)

行程 28日7時40分 東京・竹芝客船ターミナル集合～8時20分ジェット船～10時5分大島着(三原山登山、火口見学、火山植生探索など)

宿泊

都立大島公園「海のふろさと村」セントラルロッジ

費用 2万2000円を予定(船

申込 賃、1泊2食、バス代) 4月30日までに山田誠(〒152-0023 目黒区八雲2-25-17)

✉ yakumoyamada@f00.itcom.net

◆福岡自然保護全国集会

自然保護委員会

福岡支部との共催で開催します。

日程 6月11日(土)～12日(日)

場所 福岡市

日程 11日 集会(支部報告、討議、懇親会)

12日 フィールドスタディ(宝満山登山、歴史散策)

費用 ①2泊 2万4000円

②1泊 1万7000円

5月15日までに費用、①②

の区分、12日の希望コースを明記し、川口章子(〒274-0063 船橋市習志野台4-43-11102)

申込 5月15日までに費用、①②

の区分、12日の希望コースを明記し、川口章子(〒274-0063 船橋市習志野台4-43-11102)

0063 船橋市習志野台4-43-11102

FAX 047-4

63-87211

*申込者に詳細を送ります
✉ syuaki@pony.ocn.ne.jp

◆夏の欧州アルプス登山&ハイク

集会委員会

オーストリアからスロヴェニアの山々を巡ります。

日程 7月8日(金)～18日(月)

費用 54万円(燃油サーチャージ・空港使用料込、海外旅行傷害保険料・コース別特別ガイド料金等別途)

定員 20名

野崎和彦(TEL 090-8961-1866)

問合せ 野崎和彦(TEL 090-8961-1866)

✉ nozaki_kaz@yahoo.co.jp

◆カラコルムハイウェイ大横断

集会委員会

ナンガ・パルバット、フンザ周辺トレッキングとクジユラ峠を越えてカシユガルへ。仮予約を受けつけます。

日時 9月12日(月)～23日(金)

費用 38万円を予定

問合せ 三井吉由江(TEL 03-3451-5388)

✉ mtsun@cyberoz.net

51-5388

✉ mtsun@cyberoz.net

◆編集後記

●3月11日に起きた「東北巨大地震」に被災された方々には、ほんとうに言葉もありません。心からお見舞い申し上げます。3年前の6月、「岩手・宮城内陸地震」が起きたばかりの東北地方の、今回は東海岸一帯を襲った未曾有の地震と津波でした。毎日、映し出される映像には目を覆うばかりです。今月は、当初の予定を急遽変更して「私たち登山者になにができるのか」をテーマに、江本さんにレポートしてもらいました。

●日本山岳会の名誉会員で、戦前の1936年、ガルワール・ヒマラヤのナンダ・コートに初登頂した堀田弥一さんが亡くなりました。享年102歳。100歳のお祝い会のお元氣な姿が偲ばれます。ご冥福をお祈りします。(神長幹雄)

日本山岳会会報 山 790号

2011年(平成23年)3月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 尾上昇
編集人 神長幹雄
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社